

「鯨っ子学習」第5学年実践記録

指導者 北島 光浩

1 実践の内容と方法

児童の興味・関心に基づく課題を探究課題として自身が設定し、仮説を立てて学習を進め始める探究的な学びの場として15時間程度の「鯨っ子学習」を設定する。「鯨っ子学習」における探究的な学びのイメージは図1の通りである。「鯨っ子学習」の実践は、第5学年35名に対して行った。3名の児童を抽出し、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」における検証と考察を行う。また、保護者にアンケート調査を行い、その結果から実践の検証と考察を行う。

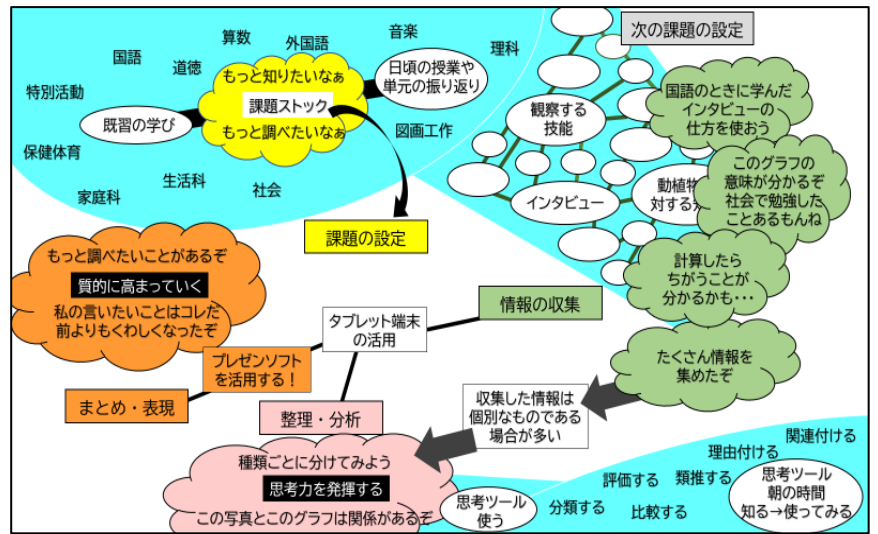


図1 「鯨っ子学習」のイメージ

2 実践の実際

(1) 実践の検証と考察

ア 課題の設定

はじめに、「鯨っ子学習のすゝめ」(図2)を作成して提示した。これは、児童が、「課題の設定」から「まとめ・表現」に至るまでの時数配分や活動例を示すことで、児童が見通しをもって学べるようにするためのものである。

また、「鯨っ子学習」に入る前に、定期的に「課題ストック」のノートに各教科で「もっと知りたい」「調べたい」と思ったことを記録をする時間を設けた。児童は、たくさんの課題をストックし、自分の興味・関心のある事柄から課題を設定していた。「課題ストック」の中から設定する際には、15時間の探究活動に見合うものなのかを「問い」を立てる際に意識するように伝えた。課題の中にある「問い」が、言葉の意味や定義を問うようなものであればすぐに答えが出てしまう。原因や信ぴょう性、影響を問うような15時間の探究活動に耐えうるものかを意識して考えさせた。この際、社会科の学習などで用いているウェビング(イメージマップ)を用いていた(図3)。「分類する」「関連付ける」際に有効な思考ツールである。自身の課題を整理する中で、知りたいことを焦点化していき、今後の情報の収集への見通しも立てることができていた。各教科の学びを生かしている姿と言える。

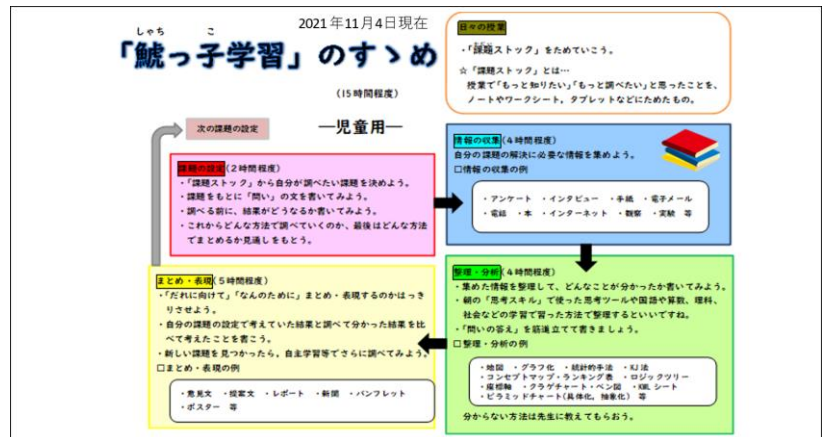


図2 「鯨っ子学習のすゝめ」



図3 ウェビングを用いる児童

各教科の学びを生かしている姿と言える。

また、「仮説」を立てる際に、ただの予想として終わるのではなく、自分の経験や知識をもとにしているという根拠も併せて述べるように伝えた。仮説に対して自分なりの根拠をもつことで、最終的に答えが出た時に自分の仮説と比較して「同じなのか」「違うのか」、「違う場合、どこが原因なのか」というようなことをはっきりとさせながら、論理的な考察が行いやすくなっていた。

A児	B児	C児
課題(問い) 「地図記号の由来は何か」 仮説 「その場所で作っている道具の形を使って作っているのではないか」	課題(問い) 「北極と南極の温度・氷の厚さはどれくらいか。また、温度や氷の厚さに影響があるのか」 仮説 「氷の厚さは、南極の方が寒いので、北極よりも南極の方が氷の厚さが厚いと思う。また、地球温暖化の影響で生き物が少なくなっていると思う。	課題(問い) 「国歌は①何番まであるのか、②意味は何か、③外国にもあるのか(アメリカ合衆国)」 仮説 「①1番目でしかない→2・3番は聞いたことがないから②おめでたい曲→国家だから③ある→オリンピックとかで流れているから」

A児は、社会科。B児は、理科。C児は、音楽科の学びの中から課題を設定していた。3名とも「課題ストック」のノートに自分の興味・関心がある事柄を忘れてしまう前に書き留めて置いていなかったと感じていた。B児とC児は、自身の知識や経験を基に仮説を立てることができていた。

イ 情報の収集

情報を収集する際に、確かな情報であることを示すために参考・引用文献を残すことの大切さを指導した。これは、国語科の学習とも関連があり、児童は学びを想起していた。調べる際には、一人一台のタブレット端末の利用だけでなく、アンケートやインタビュー、本を使って調べることのよさも考える時間を設けた。ほぼすべての児童がインターネットを利用していたが、インターネットに加えて本を利用した児童が17名、インタビューを行った児童が3名というように自ら設定した課題を解決するために、複数の方法で自分の目的や意図に即した情報を収集することができた児童がみられた(図4)(図5・6)。

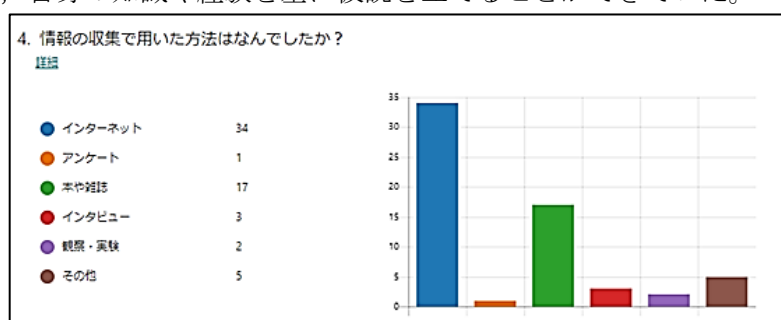


図4 情報の収集の方法

A児	B児	C児
方法 「インターネット、本や雑誌」	方法 「インターネット」	方法 「インターネット、アンケート、教科書」

3名とも、インターネットを活用している。各教科の学びから課題を設定していることもありC児は、児は、音楽科の教科書を用いていたその他にC児は、国歌に対する意識を調べるためにアンケートを作成して4年生と5年生へ配布し、集計したのもも活用していた。アンケートを用いる学びは、国語科の学びを生かしている姿と言える。



図5・6 情報の収集をする児童

ウ 整理・分析

国語科や算数科、理科、社会科等の学習で習ったもので使えるものを紹介したり、どのような方法を用いると「整理・分析」がしやすいかを互いに交流したりする時間を設けた。国語科であれば「長い文章を要約すること」「資料から分かることを文章にすること」、算数科は「表やグラフ(円グラフや棒グラフ)に表すこと」「計

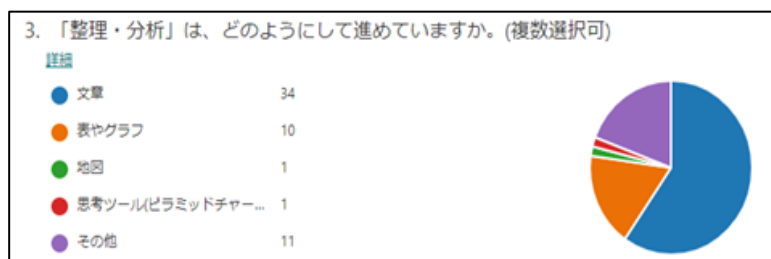


図7 整理・分析の方法

算すること」「割合をもとめること」、社会科は「イメージマップを作ること」「年表に表すこと」「意見文としてかくこと」、理科は「元素や法則などの知識を使うこと」「実験の結果をまとめること」、家庭科は「ビタミンなどの知識」等、各教科の学び生かしながら学習を進めていることを児童が意識し、収集した情報を比較したり分類したり関連付けたりしていた(図7)。KWLシートを全員に配布することで、自分が何をどこまで分かっているのかをはっきりさせながら整理できるようにした。探究の結果、得られた答えと自分がもっていた仮説を比べさせ、論理的に考察をするようにした。調べて終わりではなく、自分の仮説に立ち返ることができるようにした。

A児	B児	C児
生かした各教科の学び 「社会科：表や図，言葉」 仮説に対する考察「仮説通りだったが，ピクトグラムを記号化していることは知らなかった」	生かした各教科の学び「国語，算数科：文章やグラフに表す」 仮説に対する考察『地球温暖化の影響』と書いていたが，絶滅もしていると知って北極と南極の生き物は今危険な状態だと驚きました」	生かした各教科の学び「算数科：円グラフ，棒グラフ，表」 仮説に対する考察「昔は，1・2・3番どれも有名だったけどオリンピックなどで1番のしか歌われなかったため，いつの間にか人々の耳には1番しか入らない用になったのではないか」

C児は，アンケートの結果を円グラフに表していた。算数科の学びである表やグラフを生かしていた(図8)。仮説は，児童の推論であり必ずしも結論と一致しなくてもよいものであるが3名の児童は，ある程度仮説通りの結論に辿り着くことができていた。

エ まとめ・表現

学習の成果を伝える相手として「4年生」と「保護者」を設定して学習を進めていた。「誰に伝えるのか」をはっきりさせることで相手や目的を意識して，分かりやすい方法(レポート，新聞，プレゼンテーションソフト等)を試行錯誤しながらも考え，まとめていた。また，発表を想定して分かりやすい話し方を考え，互いに伝え合いアドバイスをし合う時間を設け，本番に臨んだ(図9)。国語科の「話し方(声の大きさ，速さ，抑揚など)」，外国語活動での「相手の反応を確かめながらコミュニケーションを行うこと」などの学習を生かしていた。

「鯨っ子学習」を終えてさらに調べていきたいことを「課題ストック」のノートに記録する時間を設けたことで新たな課題をもち，探究サイクルを意識できるようにした。また，学習を通して自身に身に付いた力を振り返ることで，成長を自覚できるようにした。

国歌はどんなイメージですか？			
	1	2	3
5年3組	真面目	ちから	日本！
4年3組	元気が出る	日本！	真面目

図8 C児の整理・分析の表



図9 4年生に伝える児童

A児	B児	C児
身に付いたと感じる力 「課題に合った情報を収集する力，表や図を使ってまとめる力，文章を要約する力」 新たな課題「見つかった。他にも，新しく作られた地図記号や使われなくなった地図記号はどのくらいあるのか調べてみたい。」	身に付いたと感じる力 「一人でも整理・分析やまとめができる力」 新たな課題 「見つかっていない」	身に付いたと感じる力 「アピールする，声の速さ」 新たな課題 「見つかった。神話の神について」

3名とも身に付いた力を自覚している。これらの力は，各教科で学んだ力を生かしながら探究的に学んだことにより身に付いたと自覚している力であり，各教科の汎用的な能力が発揮された結果とも言える。これらの力は，社会で生きて働く資質・能力であり，「鯨っ子学習」に取り組むことで発揮された力である。

新たな課題は，15時間程度の鯨っ子学習を通して「更に調べてみたい」と感じ，探究的な学びが次のスパイラルに乗って進んでいくためのものである。A児とB児は新たな課題を見付けている。A児は，今回の学びとつながりがあるが，C児はあまりつながりはない。B児に関しては，まだ新たな課題を見付けることはできていないことから，「鯨っ子学習」として自らの興味・関心から始まる学

びをスパイラルとして展開するには至っていない。今後も「課題ストック」続けることで、つながりはなくとも興味・関心を記録していくことで更なる探究につながると考える

(2) 保護者アンケートの結果と考察

家庭で家族に向けて「鯨っ子学習」の成果を伝える機会をつくり、アンケート調査を行った。児童は、家庭でも「鯨っ子学習」の成果を伝える機会をもったことで、保護者からも反応をもらい、新しい知識を得たり、新しくできるようになったりした自分の変容を感じ満足感を得ていた。

図 10 より保護者は、児童の「鯨っ子学習」の発表から、「仮説と答えの明確さ」や「答えに対する根拠」、「論理的なプレゼン」、「情報の整理」が「できていた」「まあ、できていた」と評価している割合が高いことが分かる。

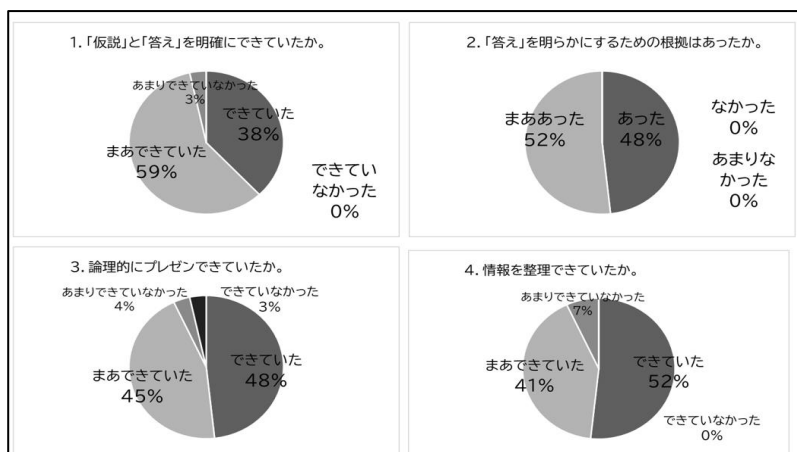


図 10 保護者アンケート①

図 11 では、発揮された力として大まかに分けると「情報を整理する力」と「プレゼンする力」の2つの力を挙げていることが分かる。これらの力は、社会で生きて働く力であると考えられる。各教科の学びを生かしながら、探究を進めた成果が表れている。

5. どんな力が発揮されていたか。

情報を整理する力（「情報収集」や「整理・分析」に関わる）

- ・昔と現在を比較する力、ぱっと見て引きつける力。
- ・ぱっと見て分かるようにグラフ化する力。
- ・伝えたい内容を図・写真で補完する力。文字、写真が見やすく、理解しやすい流れで配置する力。
- ・画面をすっきりと見やすく構成する力。
- ・聞く人が興味を持てるよう創意工夫をする力（アニメーションやクイズなど）
- ・ネットで探した写真を利用して意見や考えが伝えやすくする力、話の展開が分かりやすい力。
- ・仮説→まとめまで創意工夫し、見やすく分かりやすかった。⇒創意工夫する力
- ・分かりやすいように写真やグラフを活用する力。
- ・絵や図を使って分かりやすく伝えようとする力。
- ・パワーポイントをつくる力。主体的に学びに向かい、楽しんでいました。この学習を通して自分の意見を持ち、表現することに積極的になったと感じます。クラスメイトや下級生との意見交流でより良い問題解決方法を見つける力を養ったようです。
- ・自分で調べる力と分かりやすく説明する力。

プレゼンする力（「まとめ・表現」に関わる）

- ・見て分かりやすい表やかわいいキャラクターを使って工夫している力。
- ・人にわかりやすく話す力。プレゼンを見やすくする力（カラー、アニメーション等）。
- ・語りかけるような話し方で、自信を持ってプレゼンする力。

図 11 保護者アンケート②

3 実践のまとめ

(1) 実践の成果

- ・児童自身が各教科での興味・関心に基づく課題を設定し、「課題の設定」「情報の収集」「整理・分析」「まとめ・表現」のすべての学習過程で各教科で学んだ力を生かしながら探究する姿が見られた。

(2) 今後の課題

- ・更に成果を高めるために「鯨っ子学習」で身に付き、発揮される各教科で学んだ力の整理を行い、その育成のために効果的な手立ての洗い出しを「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」の学習過程に対応させながら明らかにしていく必要がある。

《引用文献》

- (1) 文部科学省 『今、求められる力を高める総合的学習の時間の展開(小学校編)』 令和3年3月
- (2) 文部科学省 『小学校学習指導要領解説総合的な学習の時間編』 平成29年3月